

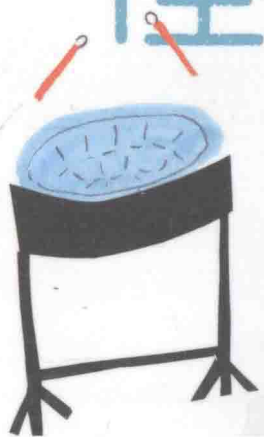
野中ともし



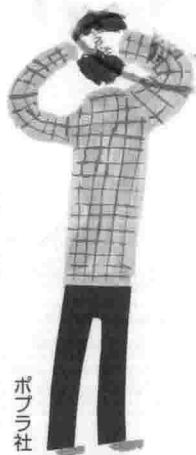
空を

楽団

海鳴屋



常州大学图书馆
藏书章



野中ともし

ポプラ社

空を
とく
しく

海鳴屋 楽団 空をいく

2012年10月5日 第1刷発行

著者

野中ともそ

発行者

坂井宏先

編集

野村浩介／鎌田怜子

発行所

株式会社ポプラ社

〒160-8565 東京都新宿区大京町22-1

電話 03-3357-2212(営業) 03-3357-2305(編集) 0120-666-553(お客様相談室)

FAX 03-3359-2359(ご注文) 振替 00140-3-149271

一般書編集局ホームページ <http://www.poplarbeech.com/>

印刷・製本

中央精版印刷株式会社

©Tomoso Nonaka 2012 Printed in Japan

N.D.C.913/335p/19cm / ISBN978-4-591-13108-4

落丁本・乱丁本は送料小社負担でお取替えいたします。

ご面倒でも小社お客様相談室宛にご連絡ください。

受付時間は月～金曜日、9時～17時です(ただし祝祭日は除きます)。

読者の皆様からのお便りをお待ちしております。いただいたお便りは編集局から著者にお渡しいたします。

本書のコピー、スキャン、デジタル化等の無断複製は著作権法上での例外を除き禁じられています。

本書を代行業者等の第三者に依頼してスキャンやデジタル化することは、

たとえ個人や家庭内での利用であっても著作権法上認められておりません。

野中ともそ

のなか・ともそ

東京都生まれ。音楽ライター、ファッション誌編集者等を経て、1998年、『パンの鳴る海、緋の舞う空』で小説すばる新人賞を受賞。

ニューヨークに在住。

小説作品に加え、児童文学、自身のイラストによる絵ものがたりやイラストエッセイ集など、多分野にわたる創作活動が続けている。

小説に『フラグラーの海上鉄道』『宇宙でいちばんあかるい屋根』『カチューシャ』『世界のはてのレゲエ・バー』『おどりば金魚』『チェリー』

『犬のうなじ』『びしゃんちゃん』『鴨とぶ空の、プレスリー』、

イラストエッセイ集に『カリブ海おひるねスケッチ』

『ニューヨーク・アンティーク物語』などがある。

著者HP

<http://www.tomoso.com>

海鳴屋楽団、



空をいく

もくじ



1

桔梗

5

2

月見草

59

3

星の河

113

4

黄色い小鳥

173

5

些
岩

229

6

空

283

海鳴屋楽団、空をいく

海鳴屋楽団、



空をいく

もくじ



1

桔梗

5

2 月見草

59

3 星の河

113

6

空

283

5

砦

229

4

黄色い小鳥

173

イラストレーション

樋口たつの

ブックデザイン

アルビレオ



海岸線に出たあたりから、まずいなという予感があったのだった。

天野里男は、ハンドルを握りながら燃料計に落ち着かない視線をちらちらとおくる。針はかぎりなく「E」の位置に近づきつつ、いやもはや到達している。無事に目的地まで着くかどうか、いちかばちかというところだろう。

夕闇のおりたつ不慣れな土地でガス欠で立ち往生というのも、愉快とはいえない話だ。それならさっさと早めに町なかでガスを補給しておけばいいものを、「あと少しいける」「この調子ならひょっとして」とたかをくくりつつ、ここまでやり過ぎしてきてしまったのだった。

初夏の暗い海、その稜線にうつすら横たわる立山連峰の影を里男は見やった。

沖合いにうかぶたつの岩影が、視界に入ってくる。ああ、これが雄牛岩と牝牛岩か。

従兄の航平から、この岩が見えてから二つ目の信号を入れること、と指示されていた目印の岩である。ということは、もうかなり近いはずだ。あらためて車窓の外にななめに視線を走らせる。

二つの岩影は、暮れかけの空のした、ごつごつした輪郭だけを際立たせている。松の木をたずさえて角ばった牝牛岩は、なぜだか里男の目に雄牛岩よりもりしく映った。

ふいに、東京の夜道でバイクを走らせていた数年まえの情景が、黒々とした岩肌に重なってくる。あのときも、ガス欠を心配する享子きょうこを「大丈夫だよ、心配すんなって」「とりあえずいけるところまでいこうぜ」となだめながら、アクセルを踏みつづけていたのだった。

しかし「大丈夫」は、住宅街の坂道でぶすんぶすんとしてぼくれた音をたてながら、こ

と切れてしまった。

炎天下、ひたいに汗の玉をうかべて享子と一緒にバイクを押してくれた。だから言ったじゃない、懲りないってこのことよね。ぷりぷりと怒りながらも、その横顔はやけに勇ましく見え、里男は申し訳なさに首を縮こまらせながらもこっそり見入ったものだった。

三十を超えて、メンテナンスが厄介になったのを機にバイクを手放した。押しにくれていたバイクからふっと手を離すようにして、恋人も去った。

そしていま、あたりまえに暮らしていた東京を離れ、ほとんど馴染なじみのない日本海沿いの地にのこのこやってきている。誘われるまま、手繰り寄せられるままに。

それがしょっぱなからガス欠ってか。牝牛岩の頂にすっくり伸びる松を横目に見送りながら、ようやく里男のなかに、それだけは避けねばとジンクスめいた焦りがうまれてきた。

信号停止と同時に、膝にひろげた地図に目をおとす。目的地までの道程をネットの地図サイト調べてプリントアウトしてくれたのは、かつての後輩でもある橋爪登美^{はしづもとみ}だった。

「落ち着いたら泊まりに行ってもいいですか？」

にっこり問われ、柄にもなくどぎまぎしたのは先月、仕事の相談にのってほしいと呼び出された席でのことだ。しかしそれが里男の「部屋」ではなく、自分が住み込む予定の「旅館」であるとすぐに気づいて、

「あ、ああ。客が来なくて困ってるみたいだから、友だち大勢連れて遊びに来てよ」

頬のほてりを感じながら、こたえたのだった。

海岸線を背にして入った通りは、車の流れもほとんどなくなり、民家と空き地、こぢんまりした畑が混在する地味な街道だった。窓からの海風がやみ、汗ばんだ額にほのかな潮のにおいがはりついてくる。海岸沿いでもないし、泊まり客が少ないのも無理はないのかもしれない。納得しながら、ふたたび燃料計を見やる。「E」を指していたっていままでの経験上、あと数キロは走行可能はずだ。ふたたび樂觀的な心地が首をもたげてきたところで、街灯もまばらな暗い視界の先に白っぽい光が見えた。

四角くうかびあがる看板の灯りがやけに頼りないとはいえ、まさしくガソリンスタンドだ。安堵の息をついたところで、例のぷすぷすという不吉な振動がたちのぼってくる。やばいな、ととっさに車を路肩に寄せたところで、振動も尻つぼみに立ち消えた。

こりや運がいいのか、悪いのか。

里男は途方にくれながら、街灯にぼんやり照らされた夜道に降り立った。

運が「悪い」ほうだったと気づかされたのは、スタンドの間近まで歩いてきたときだ。確かにそこは、ガソリンスタンドだった。あくまでも過去形の。「油」とでかかど記された看板の下、「閉店のご案内」とマジック書きされた一枚板の但し書きは一体いつのものなのか、黒くにじんだ文字がかすれている。給油機はガソリンではなく雨水でも入っているんじゃないかという風合いで錆びにまみれ、足もとのコンクリートの割れ目から雑草がのぞいている。朽ちたスタンドに立ちすくみ、里男は妙な違和感にとらわれた。

その原因が、給油スペースの屋根についた照明と、敷地の奥にある「SERVICE STATION」と書かれた長方形のコンクリートの建物にあることに気づく。屋根の天井につけられた電球は、薄暗いながらも灯っている。事務所のウィンドウにはブラインドがかかっていたが、その隙間からも白っぽい灯りが筋状に漏れていた。

ひやりとしたものに背筋を撫でられながら、建物に入っていくべきか否か逡巡^{しゆんじゆん}していると、突然灯りの奥から音がこぼれてきた。驚いた。音の唐突さではなく、その音がかすかになつかしさをともなう、やさしげな音に聞こえることに。

旋律もなく、気ままにばらばらと散らばる音は金属的だが、なにかをまとったようにま

ろやかで、触れればとけそうな軽さがある。音に導かれるように、里男は光の源へと近づいていった。そのなかに、音のいのちのような存在が灯っている気すらして。

数歩足を進めるうちに、音はいったんやんだ。え？　と、思つてとつさに踏みとどまると、ふたたび放たれた。今度は旋律だった。自由にさんざめいていた音が、やわらかくよりあわせられ、やがて躍動を抱く音階となり、光のなかをつたわってくる。

ドアノブに手をかけた。ためらいながらも、そつとまわす。

自分が探しているのが、ガソリンではなくべつのなにかではないかという気になりかけながら、思い切つて押し開く。

「あ……」と里男は口を開きかけたが、そのあとにつづく言葉は見つけられなかった。

最初に目に入つたのは、まぶしい銀色だった。それが楽器だとわかるまでに、数秒かかった。突然の侵入者にまじまじと遠慮ない視線を注ぎながらも、そこにいる演奏者たちは手をとめないでいる。彼らが手にするスティックには少しだけ馴染みがあった。だが、楽器のほうは見慣れないものだった。ドラム缶を輪切りにしたような珍しい形状の金属の楽器から、演奏者のほうへと視線をずらすと、そこでまた里男はたじろいだ。

たしかここは日本海沿いの小さな町だよな。自分の置かれた状況を理解しようとしてつとめた。なぜなら、目のまえにいる数人の人間たちのなかには、日本人にまじつて明らかに異国の顔つきもあったからだ。それも、灯りに白々とかびあがる真っ白な肌と、建物の隅

のうす闇にまぎれそうな褐色の肌。楽器を支えるスタンドの奥に何本もの足がならんでいる。国際派の幽霊ではないらしいことを一応確かめると、里男はおずおずと口を開いた。

「あの、こんばんは」

音がやんだ。というより、楽器を奏でる五人に向き合う形で立っていた年配の男が「ストップ」というふうに腕をあげたことで、皆が手をとめたのだった。統制のとれた動きだった。音をとめてしまったことに気後れしながらも、素早くつづける。

「じつは、車がガス欠でエンストしちゃいまして……」

「ありゃー」

五人のうちの一人が気の毒そうな声をあげる。人のよさそうな角刈りの青年だが、時代めいたロック歌手のようにデニムシャツの袖を肩口で切りおとしているのが、やや不釣り合いに映る。

「もしかしてここがガソリンスタンドだと思って来ちゃった？ もうとっくにクローズしちゃってるんちゃねえ」

それは見ればわかるが、と里男は内心で返しながら、ひび割れたペンキの層がはがれ落ちそうなコンクリートの天井をちらと見あげた。

「クローズなんてかっこいいもんでなく、つぶれたんだけどね。もう何年もまえに」

茶化すように言ったのは、大小ある楽器のなかでひとときわ小ぶりのものを叩いていた髪